

今再びエコフェミニズムに学ぶ

機械論的世界観批判

1986年のチェルノブイリ原発事故後まもなく書かれた、ドイツ系ラディカル・エコフェミニストで社会経済学者のクラウディア・フォン・ヴェールホフの論文「女性と世界政治 Frauen und Weltpolitik」(1988年)を最近読み返しているが、エコフェミニズムが一貫して主張してきたテクノロジーへの警戒感を、3.11以降の日本および世界情勢と重ね合わせてみると、その先見性に今さらながらに驚かされる⁽¹⁾。しかし、ヴェールホフ論文(1988年)当時の日本は「失われた10年」ともいえるエコフェミニズムの停滞期であった。

ドイツ語で「ひどい災難」を表す言葉「Heimsuchung」は、文字通り「家庭襲撃」を意味する。チェルノブイリはもとより、福島原発事故の災難を表すのにこれほど相応しい言葉もないだろう。原発というテクノロジーを推進してきた政治の結果は、人々の日常生活の隅々にまで、日々の食糧をはじめ、路上の塵、どんな小さな小屋の中にさえも侵入してくる。あたかもそれは戦場にいるかのようなのである。ここでは、もはや従来の平時と戦時との境界は消え失せ、意味をなさなくなる(平和概念がヨハン・ガルトウングの転換を遂げる)。

無限のエネルギー獲得のための「新しい機械」(原発)のみならず、さらには子づくりや妊娠・出産のための「新しい機械」(生殖テクノロジー)は女性や生命(いのち)に対するまさしく「襲撃」となっている。たとえば、先進国から来る不妊夫婦に、インドの貧しい女性たちが子宮を貸す「代理出産ビジネス」を考えてみるとよい。「代理出産ハウス」で暮らす代理母たちは4人から8人ほどの相部屋で、鉄パイプ製ベッドの他に家具はなく、食事もこの上で取ることが多いという(『朝日新聞』2011年2月19日朝刊記事を参照)。起床や就寝時間も決められ、家族の訪問は日曜日に限られるなど、さながら衛生管理の行き届いた最先端のバイオ関連工場の様相を呈し、女性たちは人間機械であるかのようなのだ。代理出産や卵子提供などの生殖テクノロジー、そして脳死・臓器移植といった近年の生命倫理をめぐる判断は難しく、それらはアメリカの核物理学者アルヴィン・ワインバーグの言う「トランス・サイエンス」の領域でもある⁽²⁾。われわれの価値判断が追いつかないほど、テクノロジーの「発展」は著しい。

エコフェミニズムの見解では、われわれの身体を含めた自然は、もはや「物」であり、利活用を待つ原料倉庫に成り果てている。それらは飼いや馴らされ、もし欠陥があれば切除され修復される。そしてその根底には、自然を機械のごとく見る世界観(機械論的世界観)が存在するという。機械であるから開発や加工・修理をされても痛みは感じないというわけだ。アメリカのソーシャル・エコフェミニストで科学史家のキャロリン・マーチャントは、その著作『自然の死』(1980年)の中で、西洋においてこのような機械論的世界観が登場したのは16、17世紀の科学革命期であると、詳述している⁽³⁾。それ以前のルネサンス期頃まではかろうじて、地球は生き物であるという観念(有機体論的世界観)があり、それに基づく倫理的規制も期待できた。たとえば大地が母親であるとすれば、鉱脈の採掘などには

自ずと規制がかけられたのである。しかし、機械論的世界観への転換とともに、女性は物化された自然と同様に資源化されてしまった。その生殖機能は人口政策と生殖テクノロジーによって管理され、その労働力は搾取され、今や世界中に男女を問わず労働の「主婦化 Hausfrauisierung」現象が蔓延している。その意味で女性は自然と近い関係にある。だが、この女性と自然の関係をめぐっては、喧々囂々の論争が日本のみならず各地のフェミニズムやエコフェミニズム内で繰り返された経緯がある。

エコ母性主義の再検討

スリーマイル島やチェルノブイリの原発事故後に先進国で盛り上がった(主として)母親たちによる環境運動には「母性主義」がつきまとう。たしかに母性は運動のスローガンとして使用された。反対に母性は、大手石油会社の原油流出事故対処や、男性中心主義的な環境保護団体のイメージ戦略にも用いられてきた。それゆえケア役割へ女性を固定する本質主義に批判的なフェミニズムは、私自身もそうであるが、概して母性主義に危惧を抱いてきた。先のヴェールホフでさえ「チェルノブイリの母親動物!」と、同じフェミニストから悪名を頂戴したそうだ。今回の3.11以降の(主として)母親たちによる活動(放射線量の独自測定や関連サイトの立ち上げなど)について、メディアの中にはそれらを「不安にかられる母親たち」として揶揄する傾向も皆無ではない。それどころか、したたかにも3.11以前から原発産業は、原発に(本質的に?)反対傾向のある女性たちへの対策として女性を起用してきた。「女には女を」作戦である。興味深いことに、フェミニズムに反感の強い日本では、キャリア女性ではなく普通の母親的、保守的な女性が原発推進のイメージ戦略に使われるという⁽⁴⁾。このように、変幻自在な母性ないし母性主義は、要注意のねじれた概念に違いない。それゆえ、女性たちによる環境運動やエコフェミニズムを単純に母性主義やエコ母性主義のレッテルで以って切り捨てることもまたできなくなるのではなからうか。今、それらを再検討する時期に来ていると思う。

[注]

- (1) クラウディア・フォン・ヴェールホフ『自然の男性化/性の人工化』(藤原書店、2003年)の第4章「女は世界政治にどうかかわるか」に相当する。
- (2) ワインバーグは1972年の論文の中で、科学と政治の交錯する領域を「トランス・サイエンス」の領域と呼び、それを「科学によって問うことはできるが、科学によって答えることのできない問題群からなる領域」と定式化した。その例として彼はいみじくも原発事故の可能性を挙げている。小林傳司『トランス・サイエンスの時代』(NTT出版、2007年)を参照。
- (3) キャロリン・マーチャント『自然の死』工作舎、1985年。
- (4) 本山央子「女には女を使え」：原発産業のジェンダー戦略」アジア女性資料センター編『女たちの21世紀』No.67、2011年9月。